!!!

ビックリマーク3

二宮敦人 Atsuto Ninomiya

アルファポリス文庫

http://www.alphapolis.co.jp/

目次

ゴミ捨て場……5
「　」……169

ゴミ捨て場

「おはようございます」

私は頭を下げる。

「あら、サチコちゃん。おはよう。今日もいい天気ね」

おばさんは、上品な仕草で礼をした。

隣のおばさんは素敵な人だ。

朝、マンションのゴミ捨て場で出会うたびに挨拶をしてくれる。おばさんと呼ぶのがはばかられるような若い奥さんで、とても綺麗。さらりとした黒髪を丁寧に束ねていて、白い歯を見せて笑う。育ちのいい女性なんだろうなあ。

「今日は早いのね」

「はい。一時間目から授業があるので」

「そう。精が出るわね。いってらっしゃい」

私は「いってきます」と返事をして、駅に向かって歩き出す。

おばさんは優雅な仕草で手を振ってくれた。

動作一つ、発言一つをとっても古風というか、品のよさがにじみ出ているというか、とにかく礼儀正しい人。おばさんの話を彼氏にしたら、「お姫様みたいだな」とのこと。それからしばらくの間、私と彼氏の間でおばさんのあだ名は「お姫様」だった。

休日など、お隣から美しいピアノのメロディが聞こえてくることがある。あの細くて白い指が鍵盤をそっと撫でている様を想像してみたりする。平日、私が帰宅するころには、お隣から夕食の香りが漂ってくる。あんなお母さんが作るカレーライスは、どんな味なんだろうか。どんな風に野菜が切られていて、どんな調味料が食卓に並べられるのだろう。うちのお母さんのような、愛情のかけらもないカレーとは全然違うんだろうな。数日でいいから、私もおばさんの子供になってみたい。

……そんなことを考えると、わくわくしてしまう。私はおばさんのことがとっても、好きだ。

でも困ったことにおばさんは、時々私を殺そうとする。

大学が終わって帰宅。

マンションは沈みゆく夕陽に照らし出されて、鮮やかに赤く光っている。自転車を駐輪場に置いて五階の部屋をふと見上げる。うちはまだ洗濯物が出しっぱなしだ。冷たくなってしまう。一人暮らしだから仕方ない。

お隣はと言えば、ベランダの雰囲気だけでも私の部屋と全然違う。

私の部屋のベランダは、単なる面倒くさがりな女子大生の洗濯物干し場。百円均一ショップで購入した小物干しに、下着でもTシャツでも何でもかんでもごっちゃごちゃに吊り下げてある。お隣のベランダは、もはやベランダではない。空中庭園？　言いすぎかな。何やら優雅なつる性植物が絡み合い、落ち着いた色合いの植木鉢が並んでいる。それらが無秩序に置かれているわけではなく、うるさすぎず寂しすぎず、絶妙のバランスで高貴な雰囲気を演出しているのだ。

やっぱり、センスがいいんだなあ。

私が園芸をやると、雑な感じになるもの。ホームセンターで買った飾りを土に刺してみたり、栄養剤やら肥料やらの袋を無造作に置いてしまったり、やたらと派手な花に自己主張させる一方で、枯れている花があったり。

あんな風にお上品には、なかなかできないわよ。

私はそんなことを考えながら、空中庭園に人影がないかを入念にチェックした。今日

はいないみたい。植木鉢の影から白い手が覗いていたりしないわよね。

大丈夫。

最近おばさんはベランダで待ち伏せをしていない。私が帰宅時間を不規則にしているからだろうか。コンビニで立ち読みしたり、日によっては近道してみたり。おばさんは私が帰宅するときに「都合よく」ベランダにいることを諦めたのかもしれない。

安心して、私はポストに向かう。ベランダの真下あたりに位置する集合ポストの口からは、チラシ類が飛び出ている。ピザ屋のチラシばっかり。私はチーズが嫌いなのに。足もとに陶器のかけらが一つ、転がっている。こないだおばさんが私に落としてきたやつの破片ね。本当におばさんは私が帰ってきた時に限って「たまたま」植木鉢を落とす。おばさんは落とした後きちんと掃除しているはずだけど、このかけらは見落としたのかな。

おっと。

嫌な気配。私は振り返って、マンションから伸びる影を見つける。何か筒状のものをかかげた人影が。おばさんだ。私は駆けだして、マンションのドアに飛び込む。

ぶおっと風がさかまく音がして、何か重量のあるモノが落ちてきた。

がしゃん。

金属質な轟音。

消火器がアスファルトの上に転がっていた。

洗濯物を取り込んで炊飯器のスイッチを入れたら、次はお風呂に水を張る。そしてご飯が炊けるまで、大学の課題を片付けていく。一人暮らしは忙しい。今日のおかずは何にしよう。ついさっき朝ごはんのおかずを考えたばかりのような気がするわ。毎食メニューを考えるって本当に大変。面倒くさいからツナ缶だけでいいかな。誰かに作ってあげるならまだしも、どうせ自分が食べるのだと思うと創作意欲もわいてこない。おなかが満たされればそれでいいわ。

お隣から良い匂いが漂ってくる。シチューか何かかな？　食欲をそそる香り。きっとおばさんは料理も上手なんだろう。今頃お子さんと一緒に夕食の最中かな。お子さんは確か小学生。おばさんが引っ越してきた時に、一緒に挨拶に来てくれた。頭の良さそうな、おとなしい男の子だったな。

チャイムの音がする。

「はい」

「あ、サチコちゃん。お隣の村山ですけれど」

インターホンごしに、おばさんの声。

「こんばんは」

「サチコちゃんは夕食もうすんだかしら。今日はね、ビーフシチューを作ったのよ。いいお肉をいただいたの。それで少し、おすそわけにどうかと思いまして」

ビーフシチュー。大好物だ。

「わあ。どうもありがとうございます」

「うふふ。たくさん作りすぎちゃっただけだから、気にしないでね。サチコちゃんもお母さんがいないから大変でしょう？　コンビニ弁当とかばかりじゃ、栄養が偏るからたまにはこういうものも食べないとダメよ」

「はい。すみません、ご心配おかけして」

「いいのよ。お母さん、早く家出から帰ってくるといいわね……。じゃあ、ドアのところに袋をぶらさげておくから、後で温めて食べてね」

「あ。すみません、今ちょっと玄関向かいますんで」

「いいのよここで。サチコちゃんも勉強とかあるんだし、すぐには出られないでしょう。お邪魔してごめんなさいね」

「すみません」

若干の沈黙。

「そう、サチコちゃん」

「はい」

「さっきね、うちのベランダに消火器あるでしょ」

「はい」

「あの消火器、もしもの時に備えてずっと置いてあるものなんだけど。風に吹かれて落っこちたのよ。壁に留めてあるんだけど、留め金が緩んでいたのね。そこに突風が吹いて。ベランダから、あの下のポストのところまで落ちたの」

「危ないですね」

「大きな音がしたと思うのよ。ちょうどサチコちゃんが帰ってくるくらいの時間帯で。驚かせてしまってごめんなさいね。ちゃんと留め金は交換しておくわ」

「はい。私は大丈夫ですよ」

「では、ごきげんよう」

「はい。ありがとうございました。おやすみなさい」

ぷつん。インターホンは、途切れた。

かつん、かつん、かつん。涼やかな音を響かせておばさんが隣の部屋に戻っていく。

ぴたり。その音が止まった。

もしかして、おばさんがこちらの様子をうかがっているんじゃないか。私は息を殺して、音をたてないように注意する。数秒後、きいとドアが開く音がして、そしてゆるやかに閉まった。おばさんは普通に隣の部屋に戻ったらしい。

私は玄関に寄り、覗き穴から外を見る。大丈夫。

ドアを開けると、ノブに綺麗な紙袋がかけられていた。中を見ると、タッパーにビーフシチューが詰められている。温めて食べてと言っていたけれど、まだぬくもりが残っている。できたてのものを持ってきてくれたらしい。

私は紙袋を持ち、ドアを閉めてチェーンロックをかけた。

テレビをつけるとお笑い番組が映った。あんまり面白くなさそうだけど、ご飯を食べながら見るにはちょうどいい。ちょうどご飯も炊けてるわ。私はお茶碗にご飯を盛り、インスタントみそ汁を準備して席につく。おばさんにもらったタッパーを開けると、いい匂いが部屋中に満ちた。やっぱり料理が上手なんだわ。この肉の切り方とか、野菜の形とか、どれも綺麗。小さいのに型崩れもしていない。細やかなおばさんの心が感じられた。

私はふたを開けたままのタッパーをベランダに出す。

　そして、お笑い番組を見ながらツナ缶をおかずにご飯を食べた。

「サッコー。起きてる？」

「おーい。酒買ってきたぞ。飲もうぜ」

　どんどんとドアを叩く音で私は目を覚ます。

　朝八時。私にとっては早朝だ。せっかくの日曜日、ぐっすり昼まで寝たいんだけどなあ。寝ぼけ眼でドアを開けると、タクマとリナが立っていた。

「おはよ！　まだ寝てたの？　うわ、サッコの家、キレー。超ひっろーい」

「リナはここんち来るの初めてか。オレは何度か来てるからな。お、ちょっと模様替えした？」

「え、何度か来てるって……やめてよそういうノロケ。不愉快なんですけどお」

「悔しかったらリナもノロケればいいだろ」

「うわ！　彼氏いないって知っててそういうこと言う……最悪だこの人。まじ最悪だ。ほんと、地獄に落ちるくらい最悪だ」

　テンションの高い二人。

「それにしても、サッコの家がこんなに広いなんて、本気で予想外。サッコ、こんな家

に一人で住んでるの？　これ完全に、学生の一人暮らしレベルの家じゃないでしょ」

「こら、リナ。サッコにだって色々と事情が……」

「あ、タクマ、いいよ。リナ、私ね……この家はお母さんと私の二人で住んでたんだけど……お母さん、失踪中なんだ。ある日出ていったまま、帰ってこないの。家出よ。だから一人で住んでるわけ。家賃は、おばあちゃんが出してくれてるから大丈夫なの」

「へー失踪中？　すっごい。そんなこともあるんだねえ。はいはい、詳しくは聞かないよ、そんなディープな話。とりあえず、いいおうちだね！　ってことよ。おじゃまっしまーす」

　リナはサンダルを脱いでずかずかと室内にあがりこむ。タクマは困ったような顔をしながら、両手に持ったビニール袋を掲げて見せる。

「今日はどうしたの」

　私の質問に、リナが答える。

「一人暮らしのサッコが寂しがってるんじゃないかと思ってさあ。一緒にお酒でも、飲んであげようかなって。お酒とかお菓子とか買ってきたよ、感謝してね。サッコのダーリンのタックンも誘っちゃったよ。ちょうど暇だって言うから。サッコもどうせ暇でしょ。もう飲むしかないよね、このシチュエーション。もはや飲めって神さまが言ってるのに等しいと思うんだよね。さ、今日は三人で潰れるまで酒盛りするわよ、ははっ」

リナはウインクをしながらにこっと笑う。明るい茶のショートヘアがさらりと揺れる。

強引で、ずうずうしい。大学の友達の中でも、一番の悪友。リナはいつもこんな調子だ。私が寂しそうだから飲みに誘うとか言っているけれど、本当に寂しいのはリナ本人に決まっている。どちらかと言えば内向的な私とは性格が正反対で、そのせいか妙にウマが合う。

一気に部屋は賑やかで楽しくなって、私としても嫌な気分じゃない。

リナはこのへんでいいか、という感じでソファにどかっと腰を下ろした。

「おいリナ、パンツ見えてる。隠せ隠せバカ」

後から入ってきたタクマがリナに言う。

その声で私もリナを見る。キャミソールにミニスカート、リナの服はいつも露出が多い。うらやましいほど細い体、大きな胸に健康的な小麦色の肌。リナと一緒に歩いているとよくわかる。すれ違う男の子たちはみんなリナに目を奪われるんだ。そしてリナは、常に無防備。暑いからって胸元を開いてウチワで風を入れたり、だらしなく足を開いたり。見ているこっちが緊張しちゃう。天然魔性の女ってやつかな。

今もだらしなく座ったリナのスカートの隙間から、ピンク色のパンティが覗いていた。

「あららタックン、私のパンツ見て動揺しちゃった？　別にいいじゃん、中身見えてるわけじゃないんだしさ。見えてるのはただの布よ、布。何の問題もないわ。それとも中身見たい？」

「アホか。だいたい、彼女がいる前で彼氏を誘惑すんな」

「もー。冗談だよっ」

リナは足を閉じながら、テレビのスイッチを入れる。画面にはバラエティ番組が映し出された。タクマの顔は、少しだけ赤くなっているような気がした。もう。

タクマがため息をつきながら、こっちを向く。

「サッコ、急に来ちゃって大丈夫だった？」

「うん。まあ、平気。どうせ暇だったしね」

「そっか。よかった」

タクマはメガネを親指と人差し指でつまんで、くいっと上げてみせた。タクマがよく見せる癖だ。紺のジーンズに薄緑のシャツを着ている。あら、今日はお洒落じゃない。黒髪の間から覗く、緑色をしたメガネのフレームとよく似合う。でも、視線を少し下げて私はげんなりする。襟が裏返っている。服は小奇麗で上品なのに、台無しだ。まあ、ちょっと抜けているのが、タクマの面白いところでもあるんだけど。

私は無言でタクマの首筋に手を伸ばす。そんなに背の高くないタクマだから、簡単に

手が届く。そして襟をきちんと直した。

「おっ」

　タクマはそこで初めて、襟が変だったことに気づいたらしい。

「サンキュ」

「せっかくのシャツなんだから、ちゃんとしてよね」

「……」

「なに」

「サッコのジャージ姿なんて、初めて見たなあ」

「寝る時はだいたいジャージだよ」

「へえ。面白い」

　間の抜けたタクマの声に、思わず噴き出しそうになる。

「そこ、面白がるポイントじゃないでしょ。着替えてくるね。ちょっとのんびりしてて」

「うん」

　タクマの声を背に受けて、私は自分の部屋へと入る。

　クローゼットを開いて、ずらっと並んだ服からどれを着ようか考える。それにしても私の服ってどれもこれも地味な色ね。黒、茶色、ベージュ、灰色、濃紺。比較的派手な

服でもパステルカラーくらいが関の山。そして肌をきっちり覆う服が多い。こういうのが好きだし、似合うから仕方ないんだけど。たまにはリナみたいな原色系で、大胆な服も着てみようかな。

　私はジャージを脱いで、ベージュの服に着替え始めた。

　着替えを終えて簡単な化粧をして、居間に戻る。タクマとリナはいなかった。どこだろう？

　ベランダから声が聞こえる。

「うわあ。これ、やばくない？　マジ白目剥いてるよ」

「リナ、よく平気だなあ。オレこういうのダメなんだよ、マジ無理」

　二人は寄り添いあうように、ベランダの近くで立ちすくんでいる。何をしているのかな。相変わらず、仲がいい二人。こらリナ、そんなにタクマの腕に胸をくっつけんなっての。

「どうしたの？」

「あ、サッコ！　見て、これ。大変だよ」

　リナの声にはちっとも大変そうな響きはない。彼女が指さした窓ガラスの向こう側を覗き込む。ベランダに何か毛布のようなものがべたっと放置してあるのが見えた。

猫だ。

三毛猫。首輪がないから、野良(のら)猫だ。猫がベランダで変な格好(かっこう)をして倒れている。異様な雰囲気(ふんいき)だ。口からは細かい泡を出して、変な方向に身をよじり、四肢(しし)は痙攣(けいれん)している。

「サッコ見た？　猫ちゃん、病気かな」

「みんな、良く平気だな。オレ本当にダメなんだよ。見てるだけでクラッとする」

タクマの顔は青ざめている。男のほうが意外とこういう時に怖がりなものね。

私は言う。

「たぶん、それを食べたからだよ」

猫の近くには、昨日私が出したビーフシチュー入りのタッパーが転がっている。シチューは少しこぼれているけど、明らかに量が減っていた。

「それをって。どういうこと？　サッコ、毒でも盛ったの？」

しっ。人聞きが悪いよ。

私は唇(くちびる)の前に人差し指を立てて見せながら、身振りでリナとタクマを近寄らせる。

「なになに？　なんなのよ」

「サッコの料理がまずすぎて、猫も卒倒(そっとう)したとかじゃないだろうな」

私は窓が閉まっていることをしっかり確認してから、小声で話し始める。

「違うよ。隣のおばさんが――」

何と説明したらいいのだろう。一瞬戸惑(とまど)う。リナとタクマは、私の次の一言をじっと待っている。

「私を殺そうとしてるの」

「えっ」

二人の眉間(みけん)にしわが寄る。

「そのビーフシチューは、おばさんからのもらいものなんだ。たぶん何か変なもの、というか毒が入ってるんだと思う。まあ毒って言っても……洗剤だとか、農薬だとか。そういうやつかと思うけど。だから私は、食べずに置いといたの。鳥とかが食べれば、毒かどうかがわかるでしょ。まさか野良(のら)猫が食べるとは思ってなかったけどね」

「毒」

「そうよ。あ、何でわかったかっていうとね。前もこういうことがあったの。お饅頭(まんじゅう)をもらったのよ。レンジでチンするだけでできるってやつ。中華街で買ってきたから本格派よって。私、肉まんとかアレ系は食べる前に割る派なのよね。だから、そのお饅頭(まんじゅう)も割ってみたの。そうしたら」

「そうしたら？」

「カッターの刃が、出てきた」
「えっ……」
肉の脂にまみれた、銀色のカッター。その光景が私の中で思い起こされる。
「わかるでしょ。おばさんがくれるものは、危険なんだよ。考えすぎかもしれないけどね。お饅頭のカッターは製造されたときに偶然、間違って混入したものかもしれないし、ビーフシチューは何か傷んだ材料が入っていて、たまたま猫が腹を下しただけかもしれない。でも、用心に越したことはないんだ。おばさんからもらった食べ物は、食べないようにしてるんだよ」
リナが手を挙げて、私の話に割り込む。
「ちょ、ちょっと待ってよ。それはわかったわ。ビーフシチューがどうとかってのはわかった。でも待って、それ以前の問題なんだけど、どういうこと？　隣のおばさんがサッコを殺そうとしてるって言ったよね？」
「うん」
「何でよ？」
私は首をふる。
「何でなのかな。私にもわからないよ」

「ええええ？」
「えっと、なんて説明したらいいのかな。とりあえず、おばさんは私を直接殺そうとはしないのよ。いや、はっきりいって殺意なんか全然感じない。朝会えば挨拶してくれるし、回覧板もちゃんと回してくれるし。近所で事件があったら、気をつけてねって言ってくれるし。すっごくいい人なの。でもなんだろう、何か変なんだよ」
「変って何がよ」
リナが詰め寄る。
「例えばね、朝。私が遅刻寸前であわてて家を出る時」
「あんた大学にも、いつもギリギリで来るもんね」
「うん。そういう時、廊下にビニール袋が敷いてあるの」
「ビニール袋？」
「そう。コンビニでもらうような袋」
「それって」
「それがぺったんこになって、廊下に敷いてあるんだよ。うっかり踏みつけると、凄く滑るのね。勢いがついていたら凄く危ない。玄関を出てすぐ曲がったところに敷かれているから。このマンションの廊下の構造、覚えてる？　あそこで勢い余って転んだら」

リナとタクマが首をかしげる。
「えーっと……」
「頭から突っ込むんだよ。非常階段に」
「えっ」
「そこ出た正面に非常階段があるからね。ここは五階。バランスを崩してそこに突っ込んだら、たぶん怪我をする。下手をしたら死ぬかもしれない。最初は思いっきりビニール袋を踏んづけて、非常階段の手すりで顔を打ったわ。しばらく痣が消えなかった。それからビニールがないかどうか、毎日注意するようになった。すぐに気がついたわ。毎日同じ場所に、同じようにビニール袋が置かれていることに」
「隣のおばさんが、置いているってこと……？」
「たぶんね。置いているのを見たわけじゃないけど」
　普通の人だったら笑いだしそうな話だ。でも、二人は私の真剣な表情を見てだろうか、静かに聞いていた。
「他にもね、私が帰ってくる時に限ってお隣の植木鉢が落ちてきたりするの。もう今までに二、三回そういうことがあった。一番危なかった時なんて、私のすぐ一メートル横で植木鉢が地面に激突したわ。植木鉢なんてそうそうタイミング良く落っこちるもの

じゃないでしょ。きっと落としているのよ。わざと」
「植木鉢なんかが当たったら、死んじゃうよ」
　怖そうな顔をするリナ。
「だから」
　私を唾を飲み込みながら言う。
「殺そうと、しているんじゃないかな」
「な、なんで？」
「さあ……」
「サッコ、隣のおばさんに何か恨まれるようなことでもしたの？」
　私は首を振る。
　おばさんが私に殺意を抱く。どんな理由が考えられるだろう。夜中にTVをつけていたのがうるさかったとか。たまに回覧板を回すのを忘れてしまうけど、それが不愉快だったとか。それとももっと他の理由かしら。思いつくことは色々あるけれど、特定するのは難しい。
　他人がどんなきっかけで殺意を抱くのかなんて、わからない。
「でもサッコさあ、結構平然としてるよね」

「え。そう？」
「そうだよ。だって隣の人が自分を狙ってるなんて、異常だよ。おかしいよ。私だったらもっと怖がると思うな」
「うん……」
　確かにそうかもしれない。
「リナの言いたいことわかるよ。でもなんかね、私感覚がマヒしているのかもしれない。ねえ、想像してよ。隣のおばさんとは凄く仲がいいのよ。本当にいい人なのよ。そんなおばさんが私を殺そうとするなんて、信じられないもの。ビニール袋を置いているのはおばさんじゃないかもしれない。誰かが毎日そこに捨てているだけかも。植木鉢だって偶然かもしれない。偶然の可能性はゼロじゃない。そうでしょ。そういう感覚のほうが、先に来ちゃうの」
　私は勢いに任せて、続ける。
「私も、混乱しているの。どうしたらいいのかわからない。どうもおばさんは私を殺したいんじゃないか……って思うこともある。おばさんは殺人未遂の危険な人、そんな気がすることもある。すぐにでもおばさんを問いただすべきなのかもしれない。でも、私にはそれができない。そんなはずはないって考えてしまうの。すべては偶然かもしれない、私の考えすぎかもしれない。確かな証拠もないのにおばさんが悪意を持っているなんて、決めつけることはできない。でしょ？」

「だけど」
「だいたいさあ、こんな状況でどうしたらいいの。警察だってまともに話を聞いてくれないよ。隣の人が私を狙って『うっかり』植木鉢を落とすんです、だなんて……悪い冗談としか受け取ってもらえない。私自身半信半疑なんだもの。まさかそんなわけないよなって思ったり、やっぱりおばさんは私を殺す気だ！　って思ったりの繰り返しで……」
　そうだよ。私だってこのままじゃ変なのはわかってる。でもどうしたらいいのかわからないんだ。あまりにも自然に、隣のおばさんが殺意を向けてきていて……逆に、対応のしようがない。そのままズルズルと、毎日が過ぎていく。
　なで。
　タクマが私の頭をなでる。
「サッコ。お前はいっつも、お人よしだなあ。まあそんなところが、サッコのいいところなんだけどな。お前の言ってることはわかった。確かにおかしな話だけど、サッコが言うなら本当だろう。オレは信じるよ。そして、実際今のままじゃ警察も動いてくれないだろう。かといって、サッコが引っ越すのも大変だ。となれば……」

　タクマが振り向いた先で、リナがウインクして言う。
「私たちの出番ってことね！　私たち、サッコの味方しちゃうからね。隣のおばさんを徹底的にさぐってやるわよ。普段やってることから、どうしてサッコをつけ狙うのかまで全部暴いちゃう。そんで証拠を見つけて警察に突き出せばいいのよ。そういうことでしょ。サッコ、私にまかせといて」
　リナは目をきらきらと輝かせている。
「え、いやそんな」
「いいのいいの！　サッコ、遠慮しないで。私はやると言ったらやるわよ。とことんまでやっちゃうから。私は私立探偵、隣の善人ぶったおばさんの正体を暴きます。ああ……私ね、私ねこういうちょっと危ない話……」
　手をぎゅっと握り、うっとうしいほど笑いながら、リナ。
「大好きなの！」
　えええ。こっちがどんな思いをしているかも知らずに。相変わらずリナはマイペースというか、自分勝手というか。
　ここまで自由に振舞われると、こっちも困ってしまう。反論のタイミングを見失ってしまう。

「もちろんオレも協力するぜ。オレとリナとサッコ。血気盛んな大学生三人だ。隣のおばさんごときには、どう考えても負けやしないだろう」
「タックン！　さっすがあ。リナと一緒に事件解決しようねっ」
　この人たちは本当に、お気楽だな。
　でもタクマとリナが私の味方になってくれて良かった。向こうから言われなければ、こっちからお願いしていたことだったし。一人でうじうじ悩んでいるよりも、早く解決しそうだわ。
　えい、えい、おー。
　部屋ではタクマとリナが事件解決するぞ、と言いながら大声で叫んでいる。ちょっとうるさいな。ここが狭いマンションだってことわかってるのかしら。いくらたまに友達が遊びに来たとはいえ、近所の人に騒ぎ声が聞こえたら迷惑だよね。せっかくの休日なんだし。ふう。私はふと窓の外を見た。
　おばさんが、にっこり笑っていた。
　ガラスの向こうで。
　おばさんが、にっこり笑っていた。
　洗濯物を干しながら。

おばさんが、

にっこり。

笑っていた。

立っているのは隣のベランダ。でも一瞬、うちのベランダに立っているのかと錯覚するほどに近く感じられた。こっちを見ている。体は物干しざおの方を向いていて、手には洗濯物を持っている。だけど首から上だけはこっちを見ている。わざとらしいほどにっこりと笑いながら。目は全く笑っていない。口だけで笑っている。その歪んだ口元に何かおぞましいものを感じる。

あらあら、今日はお隣さんは賑やかね。

そんな言葉が聞こえるような表情。その奥に隠された、黒い気配。それはとても微かな印象だけど、異常に濃い。触ったら指の先が腐って落ちそうなほど、底知れぬ闇。おばさんを覆っている白い皮膚。その薄いなめらかな膜の下に、黒と茶と赤で塗られた虫が無数にうごめいているかのようだった。

おばさんはさっきの私たちの会話を聞いていたのだろうか。

私はどう判断していいのかわからず、おばさんと見つめ合いながら立ち尽くす。

タクマとリナはまだ、えいえいおーと叫んでいる。どこか遠く聞こえるその声。

私の背中に汗がぽつりと滲みそうになった時、おばさんはふっと目線をそらした。そしてそのままするりと、風が流れるように隣の部屋へとひっこんでしまった。

そこには物干しざおに吊り下げられた、ワンピースだけが残った。

白くて綺麗なワンピース。お日様の光を浴びて、爽やかな香りが漂ってきそうなワンピース。そよ風にふわふわと、ちょうちょのように揺れる。その平和な光景を、私はただ見つめていた。

立ちすくんだまま、見つめていた。

「まずは、おばさんのことを良く知るべきだと思うんだよね」

リナが言う。隣のおばさんを調べる、作戦会議中だ。

「そうだよな。本当はどんな人なのか、どんな生活をしている人なのか。そういう情報は得ておいたほうがいいよな」

タクマが頷く。

「整理するわよ。サッコ、ノート貸して。ありがと。ちょっとサッコ、ペンも。サンキュ。隣に住んでいる人の情報をどう取るかってところだけどさ。こういうマンションの場合、色んな方法があるのよね」

「色んな方法？」
リナはそうよ、と目で伝えながら続ける。
「例えば郵便物。ここは集合ポストでしょ。隣のポストの中身を持ってきちゃえばいいのよ。鍵がかかっていたら全部取り出すのは難しいけど、はみ出しているものは取ってくる。あとは、えーとサッコ。テープ。吸着力の強いテープない？」
「え？　ああ、はい」
私はセロテープを渡す。人使いが荒い。
「セロテープしかないの？　まあ、仕方ないか。いい？　こうやってまずテープを長めに出すでしょ。そうしたら、半分より少しずらした部分でテープを折り重ねる。こうね。そうすると、端っこのほうだけ粘着面が残ったテープにできるでしょ」
粘着する部分同士を重ね合わせて、端っこに少しだけ粘着部分を残したテープ。それをリナは私とタクマに見せる。
「これをポストに入れるのよ。ちょっとコツがいるんだけど、中の郵便物にくっつけるわけ。軽いものならこれで引っ張り出せるわ。釣りみたいな感じでね。一本でダメなら二、三本使うのよ。もし失敗したら、中にテープを捨ててしまえばいい。子供のイタズラか何かだと思われるだけよ、ふふっ」

よどみなく、滑らかな手つきでテープを操って見せるリナ。その手際の良さに唖然としてしまう。普段からリナはこんなことをしているのだろうか。
「郵便物なんて大抵はダイレクトメールのたぐいだろうけど、その傾向から趣味や嗜好がわかるかもしれない。例えば男性スーツのセール情報が多ければ、旦那さんはおそらくスーツを着るビジネスマン、とかね。スーツ屋って過去に買った人に対してチラシ送るもんね。公共料金の請求書とかが釣れたら最高なんだけどな。加入しているコースや使用料金から、大体の家族構成と生活リズムがわかるでしょ。携帯電話の料金明細もいい。家族で加入していると安くなるとか、恋人同士で無料通話になるとか、そういうプランも多いから、明細内容から人間関係がある程度把握できちゃう。あれ系の明細って、毎月決まった時期にくるよね？　その時期にポストにゴミをいれまくって、いっぱいにしてやったらどうかな。請求書の封筒が、ポストからはみ出す確率が上がるでしょ」
ニコッと笑うリナ。私は声もでない。
タクマが呆れながら言う。
「リナ。お前、すげえな。気持ちいいほどの悪人っぷりだ」
「何言ってんの、タックン。こういうのは妥協しちゃだめなのよ。とことんまでやらなきゃ。だって隣のおばさんが危険な人かもしれないんだから。これはサッコの身を守る

ための、正当防衛。ふふっ。それに、お金を盗んだりするわけじゃないもん。情報を確認するだけだもん。調べてみて何の問題もなかったら、しれっと返しとけばいいだけじゃん」

　リナは、ノートに「郵便物　担当：タクマ」と書いた。

「はい、じゃあ郵便物から探るのは、タックンの分担に決定ね」

「ええっ。オレかよ」

「嫌なの？　じゃあ、これはサッコの役目ね。テープたくさん、用意しといてね。じゃ、次。他に探るとしたらこれかな」

　次にリナがノートに書いたのは、「ゴミ」という二文字だった。

「ゴミ？」

「そうよ。朝ちゃんとゴミを出す人なんでしょ、隣のおばさんは。そのゴミ袋を持ってきて、調べるのよ」

「ゴミなんて汚いじゃねーか」

「何言ってんの。そんな甘ったれた気持ちだからタックンはダメなのよ。なんてね、ふふっ。ゴミくらいその人の情報があからさまに出るものはないわ。商品の包装ゴミから、どんなものをどれくらいの頻度で買っているかがわかる。豚肉四百グラムを三日に一回

買っているから、豚肉好きだとか。ホウレンソウの茎が生ゴミに大量に入っていれば、茎が嫌いなんだとか。そのパッケージに『20％引き』とか書いてあれば、スーパーで割引が始まる時間に買い物をしているってことがわかるかもしれない。それ以外にも捨てる服の数や種類で家族の人数と体格がわかるし、捨てるコンドームの数で夫婦生活の回数まで……」

「こ、コンドーム？」

　嬉々としてしゃべるリナに、完全にタクマは引いている。

「そうそう。意外とさあ、隣みたいな真面目そうなおうちに限って変なもん買ってたりするんじゃないかな？　精力剤とかさ。縛るのに使うロープとか拘束具とか。なんちゃらローターとか。いや、わかんないけど。うわーっ、楽しみ」

「楽しみなのか？　うーん。オレには理解できない……」

「何よ、タックン。怖気づいたの？」

「違うけどさ」

「じゃあいいわ、タックンはやっぱり郵便物の係ね。私とサッコで、ゴミあさりをしましょ。いいわね、サッコ」

　私は無言で頷く。

別にゴミあさりがやりたいわけじゃない。リナがゴミあさりをこんなに楽しめる（?）理由もいまいちピンとこない。でも、とりあえず仕方ない。隣のおばさんを調べるためにリナがやる気になっている。ここは乗っておいたほうが私にとってもいい。
「おし、決まりね」
リナはノートに「ゴミ　担当：サッコ　＆　リナ★」と書いた。
いつも授業中に寝ていて私からノートを借りているリナが、紙の上に整然と文字を並べていく。なんだか変な感じ。
「なんだよ、その星マーク。リナ★て」
「えへ、可愛(かわ)いでしょ」
「今は可愛(かわい)さ必要ないだろ……」
リナに突っ込みを入れるタクマ。私はベランダの方を見る。
おばさんがいたような気がした。
けれど誰もいなかった。

「おはようございます」
私はゴミ捨て場で、頭を下げる。

「あら、サチコちゃん。おはよう。いい天気ね」
隣のおばさんは今日も綺麗(きれい)だ。穏やかな笑顔がほんのりと私の心をいやす。おばさんは華奢(きゃしゃ)な体を滑(なめ)らかに曲げながら、運んできたゴミ袋を集積所に置いた。ビーフシチューの話題には触れない。昨日、ベランダで目が合ったことにも触れない。
「あら、お友達？」
私の後ろで段ボールを運ぶリナが、ぺこっとお辞儀(じぎ)をして挨拶(あいさつ)をする。
「はじめまして。サチコの学友の山野瀬奈美子(なみこ)っていいまあす。よろしくお願いします」
「やまのせさんね。珍しい名字ねえ」
「へへ、自分の名字を全部漢字で書けるようになるまでに結構かかりました」
「あらあら、うふふ」
偽名をしゃあしゃあと言ってのけながら、おばさんと打ち解けるリナ。本当にこの子はすごい。悪だくみをしながら誰かに取り入る能力は、天才的だわ。リナがおばさんと話している間に、私は持ってきたゴミ袋をおばさんのゴミ袋の横に置く。
「今日も早くから授業なの？」
「はい。サチコも私も、一緒の授業に出るんです」
「そう。気をつけていってらっしゃい」

「はい。ありがとうございます」

上品に礼をして戻っていくおばさん。その後ろ姿を確認しながら、リナは持ってきた段ボールをおばさんのゴミ袋の上からかぶせた。小声でリナが聞く。

「見られてない？」

「大丈夫」

「よしっ」

リナは段ボールごとおばさんのゴミ袋を担ぎあげ、自転車のカゴに乗せる。すぐにサドルに腰かけると、まっすぐに走りだした。私も後をおいかける。

もちろん今日は大学には行かない。ゴミ袋を持って向かうのは、裏山だ。マンションの裏は小さな森になっていて、人はほとんど来ない。そこでゴミ袋をゆっくり調べようという考えだった。カゴの中でゴミ袋が、がさがさと音を立てて揺れていた。

「開けるわよ」

「うん」

裏山の奥、木々に囲まれたちょっとしたスペースを見つけ、私たちはゴミ袋の解体に取り掛かった。

リナがゴミ袋の口を開く。むわっとした生ゴミの臭いが立ち込め、私は思わず顔をそむけた。

「とりあえず、この上に並べていこう」

リナが新聞紙を広げ、その上にゴミ袋の中身を一つずつ載せていく。

まず出てきたのはティッシュの紙くず、チラシ、何かの説明書、レシートといった紙類。それから衣類。男物の下着、大人サイズのものと子供サイズのものと両方だ。穴のあいた靴下もいくつか。それからお菓子の袋。小さめのポテトチップスとチョコレートのものだ。乳酸菌飲料の紙パック。クリーニング屋の包装袋。化粧品の紙箱。マンガ本の帯。

「ほい、ほい、ほい。この下着は旦那さんとお子さんかな。お子さんはたぶん、小学生くらいね。小学三年生の私のいとこが、こんな感じのパンツはいてたよ。おうおう、何枚か出てくるね。しかし、下着類はあんまり触りたくないなあ。第一、こういうのって燃えるゴミに出していいんだっけ？　衣類回収とかないのかな？　それに紙パックも、スーパーとかでリサイクルするんじゃないのかな。資源ゴミ、みたいな……。まあいいかあ。私も分別とか実際、よくわかんないし」

次から次へと取り出しながら、リナがつぶやく。

あんまり触りたくないなどと言いながら、たいして嫌がるそぶりもなく淡々と作業し

ていく。不快な臭いの漂うゴミ袋に、リナの色っぽくてつややかな腕がさっと差し込まれ、すっとゴミをつかんで飛び出る。それが何度も何度も繰り返される。

　私はそれをぼうっと見つめていた。新聞紙の上にどんどん隣人の生活が明かされていくのを、ただ眺めていた。

「お。生ゴミ系も出てきたね。うひゃ、くっさ」

　ビニール袋に包まれた生ゴミが姿を現し始めた。リナがビニール袋ごとつかみ上げると、変な色の汁がぼたりと落ちる。小さな虫がたかっている。気持ちが悪い。

「これは人参の皮でしょ。これはトマトの皮だ。隣の人、トマトの皮剥くんだね。なんというお上品なおうち。私はトマトなんか、皮剥かないで食べちゃうからね。キュウリの端っこのところも取ってる。私は端っこまでかじっちゃうなあ。育ちの良さってのは、食生活に出るんだよね、あはは。おっと肉だ。肉出た。これは食べ残したものかな。発泡スチロールのパックに入ってる。骨付きの肉だね。なにこれ。なんか変な肉だね。豚かな？　トリかな。臭いね」

　リナが呟きながら新聞紙に並べた肉は、確かに変な肉だった。ハムのような円柱の形状で、表面には皮がついている。断面からは細い骨が見える。黄色い脂のようなものに紛れて、血合いというのか、赤黒い染みが見える。あまり美味しそうな感覚はしない。

どちらかと言えば妙に不吉な印象を受ける肉だ。例えるなら、血なまぐさい。肉はどれも血なまぐさいものだろうけれど、特に禍々しく、まるでついさっきどこかから切り取ってきました、というような感じなのだ。傷みかけなのだろう、嫌な臭いを発していてあまり観察する気にはなれない。

「一応このパックには、豚ロース・アメリカ産ってラベルが貼ってあるけど。この肉は、どう考えても豚ロースじゃないよね。余った肉をたまたまこのパックに入れて捨てたのかな。しかし普通、そんな面倒なことするかな。ま、いいか。上品な家ではそうするのかもね。次。えーと、これはトイレットペーパーの芯だね。うち、芯なしのペーパー使ってるからこれ見るの久しぶりだわ。それから衣類のタグ、何かの包装紙。佃煮のビニールパック。みかんの皮。毛先の広がったハブラシ。この厚紙は何だろう。あ、あれだ。ワイシャツをクリーニングした時に襟に挟まってる変な厚紙だ。ワイシャツのクリーニングって、どうしてあんなに色んな厚紙が挟まってるんだろうね。着たらすぐに汗だくのへなへなになって、また洗わなきゃいけなくなるのにさ。紙がもったいなくない？　毎朝着ていくパパを見てると、いつもそう思っちゃう」

　ひょい、ひょい、ひょい。

　リナは次々にゴミを新聞紙の上に並べ、ついに袋はからっぽになった。

「よし、後は細かいホコリくらいだわ。サッコ、内容はメモした？」

そう聞かれて、私はノートを見せる。ゴミの内容を箇条書きにメモしてある。

「おっけ。じゃ、もう一回詰めて、もう一回捨てるわよ。あ、次は別のマンションのゴミ捨て場に捨てるからね。もしおばさんと鉢合わせしちゃったりしたら最悪だからさ」

リナはテキパキとゴミを袋に戻し始めた。本当に頭がよく回る子だなあ。悪人……というわけではない。きっと天然なのだ。悪だくみをしたら、その証拠を残さず、完璧にやりきる天才。大胆でもあり、繊細でもある。ある意味、たちが悪い。

そういえば以前、電車の改札口で切符を入れずに通過していた。

「簡単だよ。自動改札機にはセンサーがあるんだ。絵に描くと、ちょうどこのあたりね。たぶん赤外線か何かがセンサーから出てるわけ。いい？　タイミングが重要なんだけど、センサーをこうやってふさぐの。ほらね。そうするとセンサーは、誤作動を起こすわけ。そして、私の存在を感知できず、スルーしちゃうのよ。ふふふ、この手を使えばいくらでも無賃乗車できるよ。キョドらず、あわてず、堂々とセンサーをふさぐのがコツ。センサーをふさぐのに一生懸命になるのはダメ。どうしても怪しい動きになって、駅員さんにばれちゃうからね」

そんな風にリナは言っていた。ちょっとした悪行を自慢するわけではなく、かといっ

てばつの悪そうに告白するわけでもなく、ただ正直にあっけらかんと。

リナはそういう子なのだ。

「何となくの感想だけどさ、ちょっと変だと思うんだよね」

リナが言う。

「何が？」

私の質問に、リナは手を止めて遠くを見つめながら答える。

「ほらさあ……あのマンションがおばさんの住んでるところでしょ。洗濯物が干してあるじゃない」

おばさんのベランダには今日も洗濯物が整然と並んでいる。きちんと一定の間隔を持って、美しく日光を浴びて。

「それがどうしたの？」

「ここからじゃよくわからないけどさ。来るときに見て、不思議に思ったのよ」

「だから、何が」

「女物しか干されてなくない？」

女物。

私は隣のベランダの様子を思い起こす。

こないだはどんなものが干してあっただろう。白いワンピースが見えた。それから？　フェイスタオル、バスタオルのたぐい。ブラジャーやパンティといった、女物の下着。いくつかのTシャツ。あれもスパンコールがきらきら光っているのが見えたから、女性用だろう。スカート。ジーンズ。それから、靴下。

確かに、明確に男物と言えるような洗濯物はなかったかもしれない。

「このゴミを見る限りでは、旦那さんと息子さんがいると思うんだよね。男物の服とかあるじゃん。このマンガの帯も、少年漫画のそれだしさ。でも洗濯されているのは、女物だけ。何でかなあ、って思って」

隣の家の表札には、なんと書いてあっただろう？

村山　隆太
　　　和子
　　　和隆

そうだ。

その三人家族のはずだ。

旦那さんや息子さんを見たことは少ないけれど、それでもたまにおばさんが呼びかける声が聞こえてきた。「あなた、おかえりなさい」とか、「こら、カズ！　ちゃんと椅子に座りなさい」とか。そうそう、そうだったよ。

そういえば最近はあまりそんな声を聞かない。なぜこんなに静かになったのだろうか。いつから声を聞かなくなったのだろう。

リナが続ける。

「男物の下着をゴミに出していたでしょ。ゴミに出すってことは、ある程度の量があるはずなのよ。にも拘わらず、洗濯はされていない。どういうこと？　男物と女物、二回に分けて干しているとかかな？　いやいや、そんな面倒くさいことしないわよね。男物は部屋干しにしている？　それも考えにくいなあ。どうせ部屋干しにするなら、どちらかと言えば女物の方をするでしょ。ブラとかパンティ、外に干すのちょっと抵抗あるもんね。そう考えると……」

確かに、リナの言う通りだ。

きちんと考えたことはなかったけれど確かにおかしい。

男がいるはずなのに、その服がない。

「単純に、隣には今……旦那さんと息子さんがいないってことか……。そうだよね。生

ゴミの量も、変だよ。えーと前の燃えるゴミから数えて三日間かな？　家族三人、三日間の生ゴミとしては少なすぎる気がする。もっと野菜とか、消費するでしょ。せいぜい女性一人分くらいのゴミに思える。別居中とか？　もしくは、喧嘩して離婚しちゃったとか。旦那の下着なんか干さないし、旦那の分のご飯も作らない！　ってスネてるとか。いや、それだと息子の下着を干していないことの説明がつかないか……。まあ、とりあえずお隣、何か家庭内で問題が起きているのは間違いないんじゃないかなあ」

　軽く言ってのけて、ゴミ袋の口を閉じるリナ。

　何とも不気味な感覚が残る。

　隣で何かが起きている。

　おばさんが私を狙うのも、それに関係しているんだろうか。何か家庭内で問題があって、そのうっぷんばらしに私に嫌がらせをしているとか？

　気持ちが悪い。

　そうだよ、前は旦那さんともたまに会ったじゃない。朝に挨拶することもあれば、帰りにたまたまエレベータで一緒になることもあった。最近全然会わないな。隣で喧嘩している様子もなかったけれど、いつの間にか出て行ってしまったのだろうか。

「まあ、タックンの郵便物パクリ待ちだね。郵便物があれば、ある程度家族の状況は推

測できるもんね。ひょっとしたら、別居中の息子さんからの手紙とか入ってるかも！　うわあ、ゾクゾクしちゃう。タックンはいつ郵便取ってくるんだろう。早く見たいなあ。ねー、サッコ」

　リナは私の気も知らず、のんびりと話し続ける。

　私は隣の部屋のイメージを思い起こしていた。

　深く考えたことも、気にしたこともなかった隣の部屋。清潔な廊下に、ならんだ長方形のドア。その奥に部屋がある。隣の部屋が。人間が潜む、住居が。外から見れば他と同じマンションの一室だけど、その中では何が起きて、どんな感情が渦巻いているのだろう……。

　立ち入ってはいけない、妙に毒々しい空間が広がっているように思えて、私はぶるっと震えた。

　夕方。

「ただいま」

　タクマがそう言って部屋に入ってくると、リナは目を輝かせて飛び起きた。さっきまで死んだ魚のような目をしてテレビを見ていたくせに、急にいきいきとしてタクマの首

に飛びつく。
「おっかえりぃ、タックン！　待ってたのよん」
「ちょっと、リナ。リナ！　胸あたってる、あたってるからっ」
「タックン。とってきたんでしょ。ポストの中身。どうだった？　面白いものあった？　早く見せなさいよ、早く」
　抱きつかんばかりの勢いでタクマに迫るリナ。ここに彼女がいるのに、接近しすぎだって。怒るよもう。タクマが持っていたカバンを差し出すと、リナがひったくるように奪う。勢い余って鞄の中のチラシが何枚か宙を舞う。
「ほんとにもう、怖かったぜ。テープを差し込んでいる最中なんか、誰かに見つかったらどうしようってそればかり考えてた。幸い、誰も通りかからなかったから良かったけど。一応ポストの中身はほとんど全部持ってきたはずだ」
「タックン、グッジョブ。まじグッジョブ。ダメオ君かと思ってたけど、やる時はやるね。おー、欲しかったものはそろってるみたいね。さてと、整理しますか」
　リナが鞄の中身を床に並べ始める。
「チラシ。ピザ屋。マッサージ店。モデルルーム。バーゲンのお知らせ。デリヘル。どこのポストにもぶち込まれるような中身ね。次。保険のダイレクトメール。主婦向けの

保険か。過去にそういった保険を問い合わせたことがあるのかしらね。おっと」
　宝物を見つけた、といった表情でリナが取り出した封筒。それは携帯電話の料金明細だった。
「素晴らしい。最高よタックン。これが欲しかったの。これを確認すればかなりの情報が手に入るわよ」
　綺麗にネイルアートされた細い指でためらいもなく封筒を破り、中の明細を取り出していく。そこに並んだ数字の列に、三人で目を落とした。
「契約者はこれ、旦那さんかな。契約端末は二台だね。利用番号が二つある」
　青い紙に黒い印字。

契約者　ムラヤマ　リュウタ

ご利用番号　090―××××―××××

料金プラン　　基本使用料プランＡ

とくとく家族割

通話料　　　　0円　0通話

家族間無料通話料　０円　０通話
パケット通信料　０円　定額プラン加入済
有料コンテンツ使用料　０円

ご利用番号　０９０−××××−××××
料金プラン　基本使用料プランＡ
とくとく家族割
通話料　７１５２円　31通話
家族間無料通話料　０円　０通話
パケット通信料　３５２３４円　定額プラン加入済につき全額割引されます
有料コンテンツ使用料　３１５円

リナが眉（まゆ）をひそめる。
「とくとく家族割。確か、家族間での無料通話が４８００円まで無料で、家族間のメールが使い放題になるプランね。でも、先月は無料通話分は全く使っていない。おかしいね。奥さんと旦那（だんな）さんがおそらく端末を保持していると思うんだけど、この二台の間で

一切通話をしなかった……。とくとく家族割にわざわざ入るような家庭で、そんなことありえるのかしら？」

通話料　０円　０通話
家族間無料通話料　０円　０通話
パケット通信料　０円　定額プラン加入済
有料コンテンツ使用料　０円

「それにこれ見てよ。片方の番号は、全然使われた形跡がないよ。通話もゼロ、メールもゼロって携帯電話持ってる意味あるのかな？　ほぼ電源切りっぱってことじゃない。おかしい。完全におかしいわよ」
　タクマが口をはさむ。
「単に携帯をほとんど使わないだけかもしれないだろ」
「苦しい解釈だと思うわ。携帯をほとんど使わなくても、通話料ゼロ、パケット代ゼロは異常よ。使う頻度（ひんど）が低いとか、そんなレベルの話じゃない。使ってないのよ。使ってないのに、お金を払ってるの。使ってないのにお金を払う理由なんて、そんなにないわ

よね……ふふふふ」
リナは笑いながら、明細の紙をくるくるとたたみ、封筒に戻した。
「隣では絶対何か起こってるわ。表向きだけは日常の生活を送っているように見せているけれど、その裏では何か異常なことが起きている。もちろんそれはただの夫婦喧嘩かもしれない。ひょっとしたら、旦那さんの家出かもしれない。もしかしたら……」
色っぽく細い体をくねらせながら、綺麗な唇が動く。
「もっと、凄いことかも」
くひひ。歯の隙間から空気を漏らすように、リナが笑った。

*

とんとんとんとん。
かずこは今、包丁をつかっています。とても爽やかな、朝です。かずこは今、朝を迎えられたことを感謝しています。とても幸せです。なぜなら今日もかずこはいい子だからです。
思えばかずこはずっと、いい子だったのです。

とんとんとんとんとん。
かずこは包丁の使い方も、とても上手なのです。千切り、針切り、みじん切り、笹がき、輪切り、筒切り、小口切り、半月切り、イチョウ切り、拍子切り、短冊切り、あられ切り、菊花切り、きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりぎりす。
きりぎりすはメスは鳴かないって本当かしら……
かずこは、そのように色々な切り方をマスターしているのです。かずこは、小さいころから色々な切り方を教え込まれたのです。かずこは、お母さんとお父さんが自慢できるような娘なのです。かずこは、料理がとても上手なのです。
かずこは、切れ切れ切れ切れなかなか切れない切れ切れ切れ切れきれい好きです。かずこはよく掃除をします。お部屋に塵が落ちないよう、上手に掃除機をかけて、丁寧に雑巾で拭きます。かずこはお部屋を美しく保つのです。
そして出たゴミを、かずこはきちんとゴミ袋に詰めて捨てます。もちろん分別もします。

カンとビンと燃えるゴミと燃えないゴミです。汁の出るような生ゴミは、ゴミ袋の中で汁漏れをしないよう、きちんとビニールに包みます。もしくはスーパーで買ったパックなどを活用して綺麗に捨てます。かずこは綺麗に捨てます。かずこは綺麗に捨てるのです。かずこは捨てるのです。

とんとんとんとんとん。

さて、ゴミが出ました。

ビニールに包んでゴミ袋に入れます。

さて、今日は朝です。違います。今日は朝です。違います。……。今日は、朝なのです……。だからかずこは、ゴミを出しに行きます。

あなた。カズ。少し、待っていてね。お母さん、ゴミ出してくるからね。

サンダルを履いて階段を下り、ゴミ捨て場に出ると、サチコちゃんに出会います。

かずこはサチコちゃんはとてもいい子だと思っています。いまどき珍しい、きちんと挨拶のできるいい子です。時々帰りが遅かったり、コンビニ弁当ばかり食べているようなので、少し気にかかったりもします。コンビニ弁当は良くありません。あれは体に悪いはずです。ご両親の作ったご飯が一番のはずなのです。そういえば、サチコちゃんにご両親はいなかったかもしれません。そうだ、そうでした。サチコちゃんにお父さんは

いません。離婚して、お母さんだけがいました。そしてそのお母さんも、失踪だか行方不明だかで、いなくなったのでした。

とにかくサチコちゃんはいい子です。

私はサチコちゃんに声をかけます。

おはよう。いい天気ね。サチコちゃんがおはようございますと返してくれます。サチコちゃんの後ろには、女の子がいます。とても露出度の高い服を着た、綺麗な女の子です。山野瀬奈美子ちゃんです。この間も会った子です。

かずこは少しびっくりします。

かずこは奈美子ちゃんがあまり好きではありません。奈美子ちゃんの目は、怪しく輝いていて気持ちが悪いのです。

奈美子ちゃんは、私に会釈をしました。私も礼を返します。その目は私の目を見ていません。私のゴミ袋を見ているようです。人のゴミ袋を見つめるのは、かずこは変なことだと思います。かずこはいい子なので、そんなことしたことがありません。人には見られたくないゴミだってあるものです。かずこはそういうことを理解しておくことは、人間としてとても大切なことだと思います。

奈美子ちゃんの不気味な気配。かずこはちょっと、というかちょっと、というかちょっ

と、というかちょっとだけですが、嫌悪感を感じたのです。

かずこはサチコちゃんと別れて、家に向かいます。

サチコちゃんと奈美子ちゃんは、ゴミ捨て場の近くでうろうろしているように見えました。ゴミにたかるハエのようです。

なんだか嫌な感じだわ。

うふふふふ。

かずこは今日も、いい子です。

*

「おばさん、行った？」

リナが聞く。

私はおばさんを乗せたエレベータが動き出すのを確認して答える。

「行ったわ」

「よし。さあて、今日もやりますわよ、宝探し」

リナが楽しそうにゴミ袋をつかみ上げる。その拍子に、むわりと異臭があたりに満ちる。

「うわっ。あのおばさんのゴミ袋、くさいなあ」

「おばさんのであるかどうかに拘わらず、この季節のゴミ袋はみんなくさいよ」

「そうだね。さあサッコ、このゴミ袋また裏山の方まで持って行って開けようよ」

「……」

私はすぐには答えない。

「どしたの。サッコ」

「もう、やめようよ」

「えっ」

リナはわけがわからないといった表情で私を見る。

「だってこんなのおかしいよ。人のうちのゴミをあさるだなんて。プライバシー侵害だし、ほらなんていうか……やっぱりおばさんに悪いよ」

「ぶふぉっ」

リナがくしゃみなのか何なのかよくわからないような音を出してせき込む。

「もう、サッコったらあ。笑わせないでよ。何そんなに真面目くさって言ってるの。どういうネタ？　それ。めっちゃ笑えるんですけど。いい、サッコ。これはゴミなのよ。捨てられたゴミ。ゴミはね、もう所有権が放棄されたものなの。意味分かる？　もうい

らないから、勝手に処分してくださいと言ってるようなものなのよ。それをかすめ取って中身を確認するのはこっちの自由じゃない。何にも気にすることないんだよ」

ニコニコ。目の前の美少女は、爽やかに笑った。

リナは本当にいつもそう。他人のものを奪う際に躊躇がないというか、「誰かのもの」という概念のハードルが低いというか……。他人のものを簡単に自分のものにしてしまい、ほんの些細な罪悪感すら持ち合わせていない。

いつだったか、私が読み終わった文庫本を貸したことがあった。もう飽きてしまったから読んでいいよ、と言って渡したのだが、リナはその本を中古屋に売ってしまったのだ。

「結構高く買ってくれたよ。サッコも飽きたって言ってたから、ちょうどよかったでしょ」

と言いながら、売ったお金でリナはジュースをおごってくれた。私は凄くびっくりしたのを覚えている。人から借りたものをまるで自分のもののように扱ってしまえる精神が、私にとっては理解しづらかった。

リナは気にしない。

細かいことは、気にしない。

「まあ、サッコがやりたくないっていうなら無理にお願いはしないけどね。でも、私は一人でもやるよ。だって絶対面白いじゃん。このまま後には引き下がれないよ。サッコ

だって、隣のおばさんの真実を知りたいでしょ？　何を考えている、どんな人なのか理解したいでしょ。ゴミ袋を開ければそれがわかるんだよ。誰にも明かしていない、おばさんの秘密がわかるんだよ」

「うん、わかるけど。でも」

「でも、何よ」

「だから、これは犯罪っていうか……道徳的にちょっと、っていうか」

リナはやれやれ、といった風にため息をついて、言った。

「あーはいはい。わかったわかった。サッコはまじめっこちゃんだもんね。リナと違うもんね。学級委員長やっちゃう系だもんね。いいよ。私、自分でやるから。裏山で一人で『調査』してくるよ。でもねその代わり、家でお風呂わかしといてね。ゴミあさりのあとすぐさっぱりできるようによ。温度は高めでローズの入浴剤よろしく。あとお風呂上がりの飲み物冷やしといて。それから、部屋には冷房きかせておいてね。はい、よろしく」

リナは私との会話を短く切り上げ、要望をぱっぱと述べるとゴミ袋を自転車のカゴに入れた。

そして「んじゃ、後でねえ」とウインクし、裏山へと自転車をこぎ出した。茫然と見

つめ続ける私を残して。

意見がぶつかった時、リナはある一定以上は抵抗しない。リナは意見を変えないし、私も意見を変えないのを知っているからだ。だから今回のように切りのいいところでまとめて、自分の楽しみを優先させる。

まあ、そんなリナだからこそ私と今まで仲良くやってこれたのかもしれないな……

遠ざかるリナの自転車から目をそらすと、私はゆっくりとマンションへと戻った。念のため入り口付近で立ち止まり、五階を見上げる。

植木鉢の落ちてくる気配はなかった。

ほっと息をつく。

エレベータホールに入ると、私を待っていたかのようにエレベータのドアが開いた。

おお、ちょうどいい。

今日は何かいいことがあるかも。

＊

かずこはわなわなとふるえます。

かずこはわなわなとふるえています。

ゴミ捨て場でサチコちゃんと別れたあと、かずこはエレベータのスイッチを押しました。鉄籠（てつかご）が下りてくる間に、かずこは気づきました。集合ポストのあたりが雑然としていることに。誰かが乱暴に郵便物を取り出したのでしょうか。チラシやビラのたぐいが、いくつか散乱しています。かずこはいい子なので、それらの紙類をひろい集めました。誰も掃除（そうじ）をしないのなら、見つけた人が率先して掃除（そうじ）をすべきなのです。それが当然のことなのです。

かずこはゴミを集めて手に持ちました。これ、どうしようかしらと考えました。ついさっきゴミを出したばかりなのに。今からこれもゴミ捨て場に捨てに行こうかしら。それとも次のゴミと一緒に出そうかしら。

少し悩んで、かずこは一瞬ゴミ捨て場の方を見ました。

二人の女の子が立っているのが見えました。サチコちゃんと奈美子ちゃんです。奈美子ちゃんはゴミ袋を一つ取り上げると、自転車のカゴに載せました。一体何をしているのでしょう。かずこにはよく理解できません。そのまま、奈美子ちゃんは自転車をこぎ出して森の方へ向かっていきました。

あのゴミ袋をどうするのでしょう。他の所に捨てるのでしょうか。わざわざゴミ捨て

場に捨ててあるものを、どこかへ持って行くなんて意味がわかりません。かずこは混乱します。

奈美子ちゃんの目を思い出します。あの、人を観察するような目。どこか卑しい野良犬のような目。

かずこにはぴんと来ました。あれはゴミあさりをする目なのです。貧しくてご飯が欲しいのか、捨てられた衣服が欲しいのか。どちらだか、わかりません。でも奈美子ちゃんは、きっとゴミをあさって何かを探しているのです。なんと卑しい。

しかし、それでは困ります。かずこは困ります。

かずこのゴミ袋もいずれは奈美子ちゃんがあさるでしょう。かずこは自分のゴミ袋をあさられるのなんて嫌です。不愉快千万です。ゴミとはいえ、それを持って行くのは泥棒です。人のものを泥棒するなんてとんでもないことです。

許せません……

かずこは自分でも止められず、わなわなが続くのです。

ちょっと、奈美子ちゃんにはお仕置きをしなければなりません。悪い子にはお仕置き。

かずこはモノの分別がつけられる、とてもいい子です。でも世の中には悪い子もたくさんいます。かずこはいい子なので、何も知らない悪い子はかずこが教え諭し、導いてあげなくてはならないのです。

かっかっかっかずこが教え諭して導くのです　導くのですよ　ええと。

……

導くのです。

かずこは思い描きます。ベランダにあといくつ、植木鉢があったかしら。植木鉢、植木鉢と。植木鉢でよいかしらね。もっと過激なもののほうがよいかしらね。剣山とか。文鎮とか。いえいえ要するに頭部が破壊されればよいのですから、植木鉢で十分ですね。でも、一応植木鉢の底に鉄板を仕込んでおいた方がよいかしらね。いや、そんなものよりもいい手段があるかもしれないのです。家には何があったかしら。包丁もあれば、バットもあります。

そうだ……そうしよう。

かずこはにこにこします。考えがまとまったのが嬉しいのですよ。

おや。見れば、サチコちゃんがゆっくりとエレベータホールに向かってきます。このままでは鉢合わせしちゃいます。こんなにやにや顔を見られてしまうのは恥ずかしいわ。

かずこはとっさに身を隠します。

少しして、足音とともにサチコちゃんがやってきました。かずこが物陰から見ている

のも知らず、伸びをしながらエレベータに乗りこんでいきました。うふふ。かずこがボタンを押しておいたから、すぐに来たのよ。感謝してね。

　かずこの視線を浴びたサチコちゃんの背中は、笑えるくらいに無防備でした。

＊

　部屋に戻り、私はすぐにお風呂に水をため始めた。ローズの入浴剤を取り出し、そのピンクの粉末をばらまく。ふわりと爽（さわ）やかな香りが立ち上る。えーと、あとはなんだっけ。リナのリクエストを思い返す。冷たい飲み物と、冷房か。

　浴室でどぼどぼと水がたまる音を聞きながら、私はエアコンのスイッチを入れる。ピピッと機械が応答したのを確認し、次は冷蔵庫を開ける。りんごジュースとアイスコーヒーがある。これなら大丈夫ね。あとはリナが帰ってくるのを待つだけだわ。

　私はテレビのスイッチを入れ、ニュース番組を見始めた。

　リナからの電話がかかってきたのは、チャンネルを三回くらい変えたころだった。

「もしもし？　私」

　携帯電話の向こうから、テンションの高いリナの声が聞こえる。

「もしもし。サチコだよ。リナ、まだやってるの。お風呂できてるよ」

「あ、ほんと？　さっすがーサッコ、優しい！　気がきくぅ」

「リナがやっといてって言ったんじゃない」

「あ、そうだっけ？　忘れちゃった」

　アハハと笑い声。

「もう。相変わらずなんだから」

「ごめんね〜。でもサッコ、今回のゴミはすごかったよ。面白いものがもりだくさん。サッコも来たら良かったのにね。見ないと損するよ」

「いいもん。隣の人のプライバシーを覗（のぞ）くなんて、したくないもん」

「ええー。本当に面白いのになあ」

「いいの。で？　電話かけてきたのはどうして？　何か困ったことでもあったの」

「いや、もうそろそろ作業が終わって帰るからさ。お風呂、ちゃんとわかしてるかなと思って」

「何よ、覚えてるんじゃん」

　再び、電話口からはしゃいだ笑い声。リナはいっつも、こうして私をからかう。

「ごめんごめん。サッコは面白いなあ、大好き。とりあえず今から帰るね。このゴミ袋をもう一度まとめて、別のゴミ捨て場に捨ててからだから……三十分後くらいには戻れるかな。マジでさあ、びっくりするようなニュースがあんのよ！　これ、どうしたらいいのかなあ。推理してみたいのよね、個人的に。でもどうなんだろ、早めに警察行った方がいいのかしらねえ」

　警察？

「リナ、どういうこと？　今何て言ったの」

「いや、だからさ。これからどうしようかと思って。あーでもサッコだったら絶対私のこと批判するんだろうなあ。まあねえ、こんなの出てきてワクワクしちゃう私のほうがきっと変人なんだけどさ。サッコのほうが正しいんだろうけどさ」

「ごめんリナ、何の話だかよくわからない。どういうこと？　何か変なものでもゴミ袋から出てきたの？」

「うん、まあそういうこと。何から説明しようかな。えーと。つまりね、ゴミ袋を開けたら中から、指とか脂（あぶら）とか……。でもね、それだけじゃなくってさあ。あーもう！　サッコも一緒に来ればよかったのよ。だったら説明の必要なんてなく一目瞭然（いちもくりょうぜん）だったのに」

「そんなこと言われても……」

「まあそうだよね。ＯＫ。すぐ戻るからさ、戻ってから話すわ。もう暑くてさ、今頭が働かないのよ。説明するのも面倒くさい、って気分。そうそう部屋の冷房と風呂上がりのドリンクも忘れずに用意しといてね」

「全部覚えてるんじゃない」

「あはは。まあ、簡単に伝えておくとね」

　リナが少しだけ、真面目（まじめ）な声を出した。

　実際に耳打ちしながら話をしているかのように、私は携帯電話に耳をすまし、息をひそめる。

「ゴミの中から、人間の手が出てきた」

　えっ。

「ひじのあたりで切断されててね。あと足の指が三本。これも間違いない、人間のもの」

「リナ」

「何重かに袋にくるまってたからね、あれは完全に意図的に隠されていたよ。すごい臭いだから、持って帰るのは嫌で、また袋に戻して捨てちゃうことにするよ。あれは男の手かな？　それなりに太かった気がする。足の指は小さかったね。小指だかなんだかわからないけど。ひょっとしたら子供の指かな。ま、帰ってから写メ見せてあげるよ。じゃね」

「リナ！」
「ばいばーい」
電話は、切れてしまった。
まるで冗談のようなリナの口調。そして冗談のような内容。だけど、リナはこういうことで嘘をつくタイプじゃないことを私はよく知っている。リナは「わくわく」していた。それが語調から伝わってきた。あのリナがわくわくするようなこと……
リナ。
嫌な予感がする。部屋に満ちるローズの香りが急に不吉なものに感じられる。
リナ。
まさか……
何度かけなおしても、リナは電話に出なかった。そして三十分が過ぎても、一時間が過ぎても。
リナは帰ってこなかった。

「サッコ。いる？」
タクマがインターホンを押したのは、午後の四時だった。

立ち読みサンプルは
ここまで

一瞬リナが帰ってきたかと飛び上がり、聞こえたタクマの声に落胆し、さらに「そうだ、タクマにも相談しよう」と私はもう一度立ち上がった。
「サッコ、リナ。誰か、いないの？」
「ごめん。今開ける」
玄関のチェーンロックを外すと、ぼんやりした顔でタクマが立っていた。
「どうしたのサッコ。血相変えて」
「とにかく中に入って」
タクマは大きくていかついシューズを玄関に乱暴に脱ぎ散らしながら、ドアを閉めた。
「あれ。いい匂いが漂ってるね。香水？」
「お風呂の入浴剤かな。ローズのやつ、入れたの」
「お風呂かあ。今日は暑いもんな。汗を流してさっぱりしたいよ。サッコ、一緒に入ろっか？」
にゅっと後ろから胸の前にまわしてきた手を、私は振り払う。
「バカ」
男が連想することって、時々ホントにくだらない。そのバカバカしさが可愛く感じることもあるけれど。今は違うでしょ。そんな場合じゃないんだよ。そのお風呂に入ろう